

# Ocean Breeze

Newsletter of the Atmosphere and Ocean Research Institute  
The University of Tokyo

2014

冬

第15号

## CONTENTS

- 02 **特集**  
東北の海は怎么样了か  
東日本大震災から3年が経過して
- 05 **報告**  
高校連携特別講座の実施
- 06 研究人生よもやま話<sup>⑧</sup> 外様から見た大海研  
新刊紹介 / My院生ライフ with図書館
- 08 客員教員紹介 / 受賞  
放課後の大海研<sup>①</sup> ふらっとアワー
- 10 イベントレポート  
AORI スタッフ日誌<sup>⑭</sup> 事務部 経理・調達チーム
- 12 From Alumni<sup>⑩</sup> 海洋を社会に問う  
人事異動一覧



AORI写真コンテスト2013 所長特別賞「お昼のAORI仲間」藤井 昌和 撮影

# 東北の海はどうなったか

## 東日本大震災から3年が経過して

永田 俊 海洋化学部門生元素動態分野 教授



東北地方の三陸沖は、黒潮（暖流）と、親潮（寒流）という、性質が大きく異なるふたつの強い海流が出会い、複雑に混ざりあう、世界的にも珍しい海域のひとつです。この海流の衝突によって、栄養塩類を豊富に含んだ深い層の水は、太陽の光が降り注ぐ浅い層へと運ばれ、海の「一次生産者」である藻類（植物プランクトン）の活発な増殖が促されます。藻類が増殖すると、それを食べる動物プランクトンや小さな魚が増え、さらに、それらを餌とする大きな魚が増えます。このようにして、世界有数の漁場である、三陸の豊かな海の生態系が成り立っているのです。

三陸地方の特徴として、もう一つ忘れてならないのが、リアスとして知られるその地形の複雑さです。実際、湾の地形や水文は実に様々で、大小、深浅のほかに、湾の内外での海水交換の良し悪しや、河川水の流入量の多寡といった点で、それぞれの湾がそれぞれの個性を持っています。さらに、これらの湾が南北に長い海岸線に沿って連なっていますから、海流の影響のしかたや、季節の移り変わりも、南に位置する湾と、北に位置する

湾とでは、自ずと異なってきます。このような様々な要因が重なった結果として、三陸地方のそれぞれの湾では、それぞれに特徴的な生態系が成り立っています。もちろん、ドラマ「あまちゃん」でおなじみのウニは、三陸全体に共通する海の幸の代名詞ではありますが、その「旬の時期」は湾によって異なり、その収穫量を左右する要因もすべての湾で同じというわけではありません。湾ごとに少しずつ異なる漁業（養殖）のやり方や、地域性にとんだ食文化も、このような、三陸沿岸生態系の顕著な多様性の反映とみなすことができ、また、それらは、この地方を旅する人々にとっての、大きな魅力のひとつになっているといえるのではないのでしょうか。

さて、大気海洋研究所では、2011年3月11日に起きた地震と大津波が、三陸沿岸生態系に与えた影響とその再生過程を明らかにし、この地域の漁業復興のお役に立つことを目指し、多くの研究者が、全国の海洋・水産研究者との協力のもとに、調査・研究を進めています（Ocean Breeze 第9号プロジェグランメーユ特集「大槌の復興から世界にひろがる海洋研究」をご覧ください



エゾアワビの写真を撮る潜水調査員



岩盤上のキタムラサキウニとエゾアワビ

い)。地震と津波による海岸や河口の地形の改変とそれに伴う湾内での海水の循環経路の変化、陸域からの大量のガレキや土砂の流入、大量の底生生物の湾外への流出といった未曾有の事態が、海洋生態系にどのようなインパクトを与えたのか？ そこからの再生はどの程度進んでいるのか？ 今後、三陸の生態系はどのように変化していくのか？ 漁業の効率的な復興のためにはどのような方策があるのか？ これらの問に対して、現段階で、一言で答えるのは容易ではありません。その大きな理由は、上に述べたような、この海域特有の海洋学的な複雑性、また、それぞれの湾の生態系が有する多

様性のために、地震や津波の影響が、様々な現れ方をしているという点にあります。

ここでは、大気海洋研究所が重点的に研究を進めている岩手県大槌湾での調査の状況や、主な成果の一部をトピックスとしてご紹介したいと思います。地震や津波の影響の現れ方は、湾や地域によって様々であるということ念頭において読んでいただくと幸いです。



赤浜クン

メーユ、赤浜クン、グラン博士は「プロジェグランメーユ」のマスコットです。詳細はこちらから。  
<http://teams.aori.u-tokyo.ac.jp/>

## 1. 海的环境はどうなったか

海の植物に当たる藻類は、浮遊性のはカキやホタテなどの主要な養殖生物の餌となり、またワカメやコンブなどといった底生性のは養殖漁業の対象生物となることで、三陸地方の水産業と強く結びついています。これら藻類の恩恵を持続的に得るためには藻類の増殖を支える栄養塩類の濃度の管理が不可欠となりますが、三陸沿岸部は地震と津波により地形や都市機能に変化が生じたほか、瓦礫や化学製品などの流入を受けたことから、栄養塩類をはじめとする化学物質の循環過程が受けた影響を正確に把握するために大槌湾においてモニタリング調査を実施してきました。震災から半年程度のあいだは湾中央部の海底付近で海水に濁りが見られましたが、湾内の浮遊性藻類の生物量ならびに栄養塩の濃度のレベルやその季節変動の様子といった物質循環の基本的な特性に変化は見いだされませんでした。また湾内より採取した堆積物に含まれる重金

属や有機汚染物質などの濃度は環境基準値を下回っており、心配されるレベルではないこともわかりました。現在、三陸沿岸部では復興に向けた動きが加速しており、今後は防潮堤の建設や都市基盤の整備も行われることから、引き続き湾内の環境を注視していく必要があるものと考えています。(福田 秀樹)



調査用に大槌湾で養殖したワカメの採取風景



グラン博士

## 2. アワビはどうなったか

三陸を代表する海の幸「エゾアワビ」は、海藻の生える浅い岩場（岩礁藻場）に棲んでいます。「三陸産」のほとんどが「養殖もの」ではなく、「天然もの」です。地震・津波の影響は、震源からの距離や湾の形状、向きなどによって大きく異なり、同じ



大槌湾のホソメコンブ群落内に棲むエゾアワビ

湾内においても場所によって、たとえば湾口部と湾奥では異なることがわかってきました。また、生態系の違い（例えば、砂浜と岩場など）や生物の種類によっても受けた影響はかなり違います。大槌湾の湾口部にある岩礁藻場では、藻場を形成するホソメコンブなどの海藻類がそれほど大きな損傷を受けずに残り、藻場の内部に棲む大きなおとなのアワビもほとんど減りませんでした。藻場の外側の岩場を主な棲み場とする4cmよりも小さな子供のアワビは多くが流されました。エゾアワビは4cmまで成長するのに3年以上かかりますから、少なくとも3年分くらいの若い年級がかなり減ってしまいました。彼らが漁獲できる大きさ（9cm）になる今年あたりから、大きなアワビは減り始めるかもしれません。大きな親アワビが減ると、新たに生まれる子供の数も減るかもしれません。これ以上おとなの数を減らさないように、将来にわたってアワビ漁業を継続していくためには、これから数年は獲る量を減らす必要があると思います。（河村 知彦）

## 3. サケはどうなったか

三陸沿岸には多くのサケが生まれた川（母川）に回帰し、古くから主要産物として地域経済を支えてきました。現在、岩手県のサケ漁獲量は積極的な人工孵化事業によるものです。これまでに沿岸に回帰したサケは震災前に放流したものが主体です。漁獲量に震災の影響が出そうなのは、今年（2014年）の秋以降と考えられます。それ以前の問題として、近年全国的にサケの漁獲量が大きく低下していることが挙げられます。岩手県でも、1990年代前半の漁獲量は毎年3万トン以上もあったのに対し、1996年（約7万トン）をピークに減少に転じ、2000年以降2～3万トンに落ち込みました。2011年からは震災の影響が重なり、1万トンを切るまでになっています。回帰率の低下が不漁の原因とみられていますが、震災後は河川・沿岸海洋環境が大きく変化したために、稚魚の生残や成魚の回帰行動にも影響が出ているのかもしれない

。東北マリンサイエンス拠点形成事業では、今後、大槌湾での稚魚の分布域・生残状況、成魚の母川探索行動について詳しく調査し、震災の本種生態への影響、低回帰率の要因などについて明らかにしていく予定です。（北川 貴士）



データロガーをつけたサケ

## ●●● 高校連携特別講座の実施

●●● 横山 祐典・宮入 陽介  
●●● 海洋底科学部門海洋底テクトニクス分野

海洋底テクトニクス分野横山研究室では、東京大学大気海洋研究所で行っている古環境解析研究の一部を体験してもらうことで科学に興味をもってもらおうと、われわれが鍾乳石研究を行っているフィールドがある熊本県、および本所所在地の千葉県の高専と連携して特別講座を開講しました。本所広報室や所長室、そして「最先端・次世代研究開発支援プログラム」による援助によって成立した企画で、熊本県立済々黌高等学校、熊本県立東稜高等学校、千葉県立薬園台高等学校の計3校から70名の参加がありました。

本講座では、“水の循環”をテーマに、身近な自然物を分析することで、どのような科学的知見が得られるのかを実際に体験し、最先端の地球化学分析装置を使った分析やデータの解析、そしてそれらの検討

までを行うという一連の研究の流れを体験してもらいました。

### 熊本開講講座

2013年9月18日(水)から19日(木)にかけて、熊本県立済々黌高等学校・東稜高等学校の生徒を対象に、座学とフィールドワークを行いました。初日は各高校へ出向いての、いわば出前授業です。古環境を研究する意味と、その研究が自分たちの身近にある自然を対象に行われていること、自分の身の周りの自然環境を解析することがグローバルな環境解析の礎になることなどを紹介しました(写真1)。

翌日は実際にフィールドへ出かけて行って野外調査を行いました。まずは実際に露頭を観察し(写真2)、地球科学が地球の歴史を実際のフィールドからどのように読み取るのかを体験してもらい、その後、実際に球磨川と鍾乳洞で分析試料の採取をしました。現場での水温やpHの測定のほか、採水作業にあたって分析試料の試料を汚染しないように採水することに、どのように気を使う必要があるのかを実

際に体験してもらいました。これら試料は、後日の柏開講講座で分析に用いました。

### 柏開講講座

2013年11月8～10日(金～日)の3日間にわたって、千葉県柏市の大気海洋研究所において柏開講講座を開催しました。熊本県立済々黌高等学校・東稜高等学校から各校5名ずつの代表生徒のほか、柏開講分からは地元の千葉県立薬園台高等学校の生徒15名も加わり、加速器質量分析装置による、鍾乳石の放射性炭素分析や、熊本で採水した試料の誘導結合プラズマ発光分析を行いました。これらの分析によって、水や岩石に環境の指標となる情報が記録されていることを実際に確認してもらいました。

参加者たちはTAである大学院生の指導を受けながら実際に最新の分析機器を使ってデータを取得し、その解析、考察までをTAの指導のもと行いました(写真3～5)。本講座終了後、熊本県の高専生はそれぞれの高校に戻って報告を行いました。

\*

9月の熊本開講講座と11月の柏開講講座で延べ5日間にわたった本講座ですが、受講後の参加者の感想の多くに「理系進学へのモチベーションがあがった」「地球科学分野への進学をしたい」といった記載があり、開講目的がおおむね達成できたのではないかと手応えを感じました。また本講座の様子は熊本県の地方紙『熊本日日新聞』にも取り上げられました。本所の活動が地元にも関心を持って伝えられたことは幸いです。(宮入 陽介)



写真2 野外での露頭観察 (熊本県球磨郡球磨村にて)



写真3 TAに教わりながら試料の秤量をする参加者 (大気海洋研究所にて)



写真4 違う高校の生徒間での交流 (大気海洋研究所にて)



写真5 測定結果を真剣に解析する参加者 (大気海洋研究所にて)

### 講座参加者の声(一部抜粋)

- 今回の球磨川・球泉洞の水のように、同じ水でも含まれている成分がまったく違うということを実感しました。(千葉県立薬園台高校・嵯峨 良理さん)
- 千葉県の高専の方々とうまくできるのだろうか、と思っていましたが、最後には互いに議論できるほどになりました。(熊本県立東稜高校・川端 悠平さん)
- 今よりもっと地球科学について学びたいと思うようになりました。(熊本県立済々黌高校・稲津 尚さん)

## 外様から見た大海研

竹井 祥郎 海洋生命科学部門 生理学分野 教授

大気海洋研究所の研究者たちが自らの研究生活について、反省談、失敗談、今だから言える話、などなどを後進に資することを期して語ります。

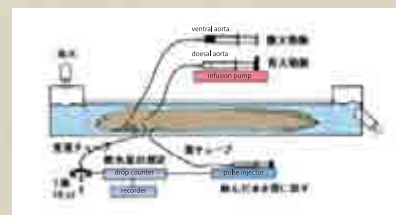
一生好きなことが出来ると思って研究者になったのに、人生そう甘くはない。最初の職場であった医学部では、「鳥や魚の研究をするのはけしからん、哺乳類をやりなさい」と独裁者(教授)に言われ、逆らって10年余り完全に干されていました。しかし、魚の研究を細々と続けていたおかげで、旧海洋研に呼んでもらいました。「さあこれで自由に研究できるぞ!」と勇んでいると、隣の部屋の助教授に「船に乗らないのにどうして海洋研に来たの? おかげで泣いている人がいるんだよ」といじめられました。旧海洋研では、船に乗らない人は異端児だったのです。確かに船を用いた地球レベルの研究や、社会が要請する「気候温暖化」や「水産資源変動」などの役立つ研究をしている人には、この肩身の狭さはわからないでしょう。しかし、この思いが私たちを奮い立たせてきました。役に立たない研究をしているからこそ、「この分野では世界一の研究をして認めてもらおう」と思うからです。おかげで、内田清一郎教授(内田海洋学術基金の寄付者です)から脈々と続いている

「魚類の浸透圧調節」の研究は、今でも世界を牽引し、毎年多くの研究者を世界中から受け入れています。

私が旧海洋研に来た20年前には、人事から「私立大学から異動してきた最初の教授会メンバーです」と言われました。当時はそれほど「学生時代から海洋研一筋」の人が多かったのです。しかし、次第に人材も研究も多様化して、特に大海研になって加速されました。大海研の良さは、学際性と多様性にあると思います。その懐の大きさのおかげで、私たち外様も生き残れるのです。いろんな考え方の人がいるため教授会は長いですが、他を知るよい機会です。これからの大海研は、その多様性を活かしていくことが重要です。私たちは宣伝が苦手ですが、生理学的な観点から大海研の共同研究に貢献したいと思っています。

私は、海と川を往来するウナギを用いて、海で生きるしぐまを研究しています。ウナギは海水中では大量の海水を飲んでおり、飲んだ海水の90%を腸で吸収します。ヒトが海水を飲む

とひどい下痢をするので、その違いを知りたいと思うのです。こんな研究に没頭していますが、魚の生理学については他にも詳しいので、その知識や経験を皆さんに利用してほしいと思います。例えば、海産真骨魚(海水魚)は窒素代謝物を $\text{NH}_4^+$ として鰓から大量に排出し、代謝の結果生じる二酸化炭素を $\text{HCO}_3^-$ として肛門から大量に排出します。海水魚の巨大なバイオマスから考えると、これらイオンは海洋酸性化の緩和に役立つとともに、豊かな栄養塩を海洋に与えてサンゴなどの成長に寄与していることに疑いありません。今後はこのような生理学的な情報をできるだけ皆さんに発信して、共同研究の芽を育てていきたいと思っています。

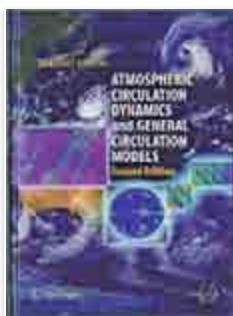


ウナギは海水中で盛んに水を飲みます  
ウナギはとても優れた実験材料でもあります

## 書き手自身による 新刊紹介

### Atmospheric Circulation Dynamics and General Circulation Models 2nd edition

Satoh, Masaki  
730p, 2014, Springer Praxis Books



本書は、2004年に出版した大気大循環理論と大循環モデル(GCM)に関する著書の改訂版です。大気大循環研究への入門として、第一部:基礎概念、第二部:大循環構造論、第三部:数値モデリングの構成とされています。初版では、第三部を従来型GCMである静力学スペクトルモデルの解説としましたが、改訂版では非静力学正20面体格子モデル(NICAM)についての章を加えました。また、初版における誤字について、多くの方から指摘いただきましたが、この機会に修正しました。ご意見等、歓迎いたします。(佐藤 正樹)

### 気候変動はなぜ起こるのか グレート・オーシャン・コンベヤーの発見 ウォレス・ブロッカー 著、川幡穂高ほか訳 新書判・210ページ・860円(税別) 2013年12月・講談社ブルーバックス



コロンビア大学ラモント・ドーハティー地球科学研究所の教授であるブロッカー教授は、気候変動研究における現代最高の科学者です。地球規模の海洋大循環が「一筆書き」で書ける有名な図はブロッカー教授の考案によります。この大循環の変調こそが地球上の気候に大きな影響を与える、という考えを実証していく過程をつづったのが本書です。大学院生3人が均等に全訳し、川幡が原文と訳文を読み内容をチェックして文章を整えました。喜ばしいことに、大気海洋研究所の大学院生の日本語の品質が高いと出版社の人に誉められました。(川幡 穂高)

# My院生ライフ with 図書館

研究生活には、文献の利用とそれをサポートする図書館が欠かせません。  
大気海洋研究所で学ぶ大学院生に、研究生活の様子とおすすめ本を聞きました。  
協力 沖野郷子、大気海洋研究所図書室  
本記事は、柏キャンパス一般公開2013での図書室展示を元にしました

## 徐 美恵

海洋生態系動態部門底生生物分野博士3年



海洋底生生物の研究室に所属しています。ふだんはお昼前後に登校して、深夜12時頃までデータの解析や論文執筆を行っています。論文は電子ジャーナルを使って研究室で読みますが、研究の関係上紙媒体でしか残っていないものも多く読むので、図書室の蔵書や他大学からの取り寄せサービスを頻繁に利用しています。家においても図書室で取り寄せ可能な蔵書の検索が出来るので、とても助かっています。



### 『天才科学者たちの奇跡』

三田誠広 著、PHP 研究所、2005 年  
(現在、版元品切中。Kindle 版はあり)

大学生の時に読みました。面白さと読みやすさに感銘を受け、小学校の先生を目指す友達に将来クラスで読み聞かせをするよう勧めました。この本を通して、ガリレオやパスカルを始めとする科学者達の偉大な発見が、日常の些細な出来事と密接に関係しているのが実感出来ると思います。研究とは専門的で難解そうに思えますが、その根本で実は私たちの生活と繋がっている。そう感じさせる、お勧めの1冊です。

## 長谷川 久美

海洋生命科学部門生理学分野博士1年



生理学の研究室に所属しています。毎日朝に魚の世話をし、その後実験や研究に関わる論文を読んだりしています。初めて行う実験を組むときに、図書室に行き、実験手法の本で勉強しています。また、電子ジャーナルで論文を入手し、実際どのように実験を行っているのか、どのような研究が行われているのかもチェックします。



### 『科学哲学』

サミール・オカーシャ著、岩波書店、2008 年  
学部生の時に読みました。科学とはなんなのか、ということ丁寧に書いています。物理学、生物学、心理学における哲学的問題を取り上げ、わかりやすく解説されており、科学という概念について考えるようになった本です。タイトルが堅苦しい印象ですが、非常に読みやすく面白い本でした。

## 村島 淑子

国際連携研究センター国際学術分野修士2年



海洋大気化学の研究室に所属しています。ふだんの生活スタイルは、屋上で大気観測をしたり、実験室でサンプルの分析や測定方法の検討をしたり、学生室でゼミの準備や研究分野の勉強をしています。船に乗って海洋観測に行くこともあります。ふだんの勉強では、電子ジャーナルを使って論文を読んだり、手っ取り早く海洋関係の基礎知識を頭に入れたい時は、図書室にある分厚い本を借りに行きます。



### 『ご冗談でしょう、ファインマンさん』(上)・(下)

R.P. ファインマン著、岩波書店、2000 年  
ノーベル賞受賞物理学者であるファインマンが自らの体験をユーモアたっぷりに語る短編集のような本。考え方、特に着眼点が独特で、今後の大学生活に良いヒントを与えてくれると思います。出版されてから10年以上経っていますが、自分には無い新しい視点を与えてくれる良書です。読み物としても面白いので、理系に限らずおすすめします。

## 山根 美咲

国際沿岸海洋研究センター沿岸保全分野修士1年



バイオロギング手法を用いた動物行動を研究する研究室に所属しています。バイオロギングとは、小さな機械やビデオを野生動物に取り付け、その自然界での行動を調べる研究手法です。私はアカウミガメの研究をしており、夏の間は岩手県の大槌町でデータを取り、それ以外の時期は午前中に登校して研究室で今まで得たデータの解析というのが普通の生活です。解析の途中で気になることがあれば電子ジャーナルを利用して論文を読みます。



### 『ソロモンの指環』

コンラート・ローレンツ著、早川書房、2006 年  
高校の教科書にも出てくる、鳥類の刷り込み行動を発見したことで有名なノーベル賞医学博士賞受賞者のコンラート・ローレンツさんが書いた本です。高校生の時に読み、私が動物行動学という研究分野に興味を持つきっかけになりました。実際にローレンツさんが行った研究の内容が書かれており、身近なようで意外と知らない動物の世界を、実際にその世界に入り込むことで明らかにしていく様子が描かれています。動物に興味ある方にも、そうでない方にも、是非読んでほしいオススメの一冊です。

客 員 教 員 紹 介



**Yuzhi LIU**  
 気候システム系招へい研究員  
 委嘱期間  
 2013.10.15 ~ 2014.3.31  
 中国・蘭州大学准教授

For the five months visit to CCSR/AORI, I have enjoyed a half already. I'd like to take this opportunity to thank all of those at CCSR/AORI whom I have met. But most of all, I'd like to thank my host, Prof. Teruyuki Nakajima, for his kindness and professional insights. During staying in CCSR/AORI, I worked on Nonhydrostatic Model (NHM) and SPRINTARS model to study the aerosol distribution, property and the interaction with cloud targeting on Tibetan Plateau, China. I hope through continuing collaborations, we can work together to study the aerosol property over East Asia and the effect on climate.



**Chun-Ta LAI**  
 気候システム研究系招へい准教授  
 委嘱期間  
 2013.12.17~2014.3.2  
 米国・サンディエゴ州立大学准教授

I am an ecosystem ecologist and an Associate Professor at San Diego State University, CA, USA. My research program focuses on biosphere-atmosphere interaction, examining the response and feedback of terrestrial ecosystems to the climate system. In my laboratory we use stable isotope ratio and meteorological techniques to measure, and models to integrate information across multiple scales in global change research. Current projects, funded by US NSF, DOE and USDA, help make a suite of new surface water and carbon isotopic observations in both natural and urban environment. I am collaborating with Prof. Kei Yoshimura and his students to implement process-based knowledge into new generation isotope-enabled land surface models in coupling with GCMs. I am looking forward to a productive visit at AORI.

受賞



**甲斐野 翼**  
 研究連携領域生物海洋学分野  
 修士課程  
**土木学会全国大会  
 第68回年次学術講演会  
 優秀講演者賞**  
 [2013年9月]

受賞題目

「コンクリート護岸がニホンウナギの分布に与える影響」



**川上 達也**  
 国際沿岸海洋研究センター沿岸保全分野、  
 東北マリンサイエンス特任研究員  
**平成25年度岩手県  
 三陸海域研究論文  
 岩手県知事賞**  
 [2013年12月]

受賞題目

「東日本大震災が三陸のアユ個体群に及ぼした影響とその後の回復過程」



## 放課後の大海研 ①

# ふらっとアワー

「ふらっとアワー」をご存知ですか？ 知らないと答えたあなた、以下の項目に一つでも当てはまれば立派な「ふらっと予備軍」です。

- ①金曜の夕方、大気海洋研究所1階ロビーで酒を酌み交わしている謎の集団を目にして「あ、いいな」と思った。
- ②実際に謎の集団の一員となって酒を酌み交わした。
- ③岡英太郎准教授と個人的な付き合いがある。

当てはまった方、多いのではないのでしょうか。ふらっとアワーとは、普段なじみのない研究分野間の交流を目的として、有志により毎月1回金曜夕方に開かれる飲み会です。所内・所外を問わず誰でも「ふらっと」参加可能で、酒類・おつまみは各自がその場で実費購入、というスタイルです。ふらっとアワーは、単なる有志集団にもかかわらず、最近では大海研の公式行事である七夕やクリスマスパーティー、夏の所内バーベキュー大会に際しても酒類の提供を行っており、今や大海研のイベントには欠かせない存在となっています。しかし、「謎の集団」と書きましたように、その運営の実態については意外にも知られていないように思います。

ふらっとアワーは、「ふらっとアワー運営グループ」によって取り仕切られています。運営グループは学生・教職員あわせて10名ほどで構成され、メーリングリストで連絡を取り合っています。毎月、第1金曜日が近づくと、どこからともなくふらっとアワー開催の提案がメーリングリストに流れ、参加可能なメンバーがこれに呼応する形で予定をすり合わせていきます。開催当日には、秘密の小部屋か



ふらっとアワー運営グループです

ら酒類のストックを運びだし、おつまみの買出しにも出向きます。そして、終了後には会計を締め、売り上げを秘密の金庫にしまします。ふらっとアワーは基本的に「利益を出さない」、「すべて還元」をモットーに活動していますが、販売価格の設定上、どうしても仕入れ値以上の売り上げが出てしまうことがあります。そんなときは、次の回で大幅値下げ・出血大サービスの還元セールをします。見逃せませんね。

ふらっとアワーは今から6年前の2007年、当時中野にあった海洋研究所の懇談室で、3人の若手教員(岡(英)・中山・濱崎)がスタートさせました。以来、現在(祝・55回!)に至るまで、さまざまな企画で参加者たちを喜ばせてきた歴史があります。過去の企画は、大槌産海産の宴(第2回)、どて煮(第4・19回)、おでん(第6回)、そば(第12回)、ホットドッグ(第13回)、花火(第24回)、樽生ビールサーバー(第51回)などなど、枚挙にいとまがありません。今期も「ふらっと」立ち寄れる飲み会を提供していこうと思っています。

いかがでしたか。ふらっとアワーの謎が解けたところで、ぜひ一度足を運んでみてください。また、ふらっとアワー運営グループは常にメンバーを募集しています。運営に携わることで、普段の研究生活ではまず関わらないであろう人たちと関わり、酒をふるまい、時にはちゃっかり「お魚倶楽部はま」でごちそうになれたりします。お酒を飲むのが好き、ふるまうのが好き、お酒は飲まないが飲み会でわいわいやるのが好き。そんな方は、運営側としてふらっとアワーに参加してみてください。日々の生活にちょっとしたスパイスが加わることを請け合いです。

(佐久間 啓

ふらっとアワー運営グループ/底生生物分野D3)



2014年1月30日のふらっとアワー会場風景

# Event Report

イベントレポート

## ■ 大気海洋研バーベキュー大会

2013年10月4日(金)、厚生委員会とふらっとアワーの共催で、恒例のバーベキュー大会が行われました。今回のメインは豚の丸焼き！大阪からはるる空輸でやってきた仔豚の前で写真を撮っていた人も多かったのですが、豚さんのお肉は開始約1時間後には参加者の胃袋へとおさまりました。通常のバーベキュー食材の他にも松茸や気仙沼産のさんまなどが続々と焼かれ、秋の味覚に舌鼓を打つとともに親睦を深めた夕べとなりました。(山口 飛鳥)



バーベキュー開始時(左)と終了間際(右)の豚の丸焼き



AORI写真コンテスト2013 海・空部門1位「コケムシ学者と海」広瀬 雅人

い！科学の世界」が開催されました。大気海洋研究所でも「柏の海で学ぼう！遊ぼう！」(大気海洋研究棟)および「気候がわかる、温暖化がわかる」(総合研究棟)と題して、様々な展示や体験型イベントを行いました。例年であれば金・土の2日間開催のところ、台風接近のために金曜日だけの開催

となってしまいましたが、多くの方にご来場いただき、大気海洋研究棟の1階ホールは人で溢れんばかりのにぎわいでした。土曜日に予定されていた講演会や打ち上げなど、いくつかのイベントが中止となってしまい不完全燃焼の部分も残りますが、そのリベンジは来年度に果たしたいと思います。

(羽角 博康)

の3週間にわたって開催されました。今年は日々練習を重ねるチームが順当に勝ち進み、海洋生態系動態部門が優勝。準優勝が海洋底科学部門、第3位は事務局＋共同利用共同研究推進センターでした。気候系スタッフチームはユニフォームをそろえての参戦で、大会が大いに盛り上がりました。今年のみなさんが楽しめる大会を目指して「予選3位トーナメント」も企画してみたのですが、いかがだったでしょうか？来年も皆さんが楽しめる卓球大会になるようにしたいと思っています。(日下部 誠)

## ■ 柏キャンパス一般公開2013

2013年10月25日(金)、東京大学柏キャンパス一般公開「知りたい！触れた



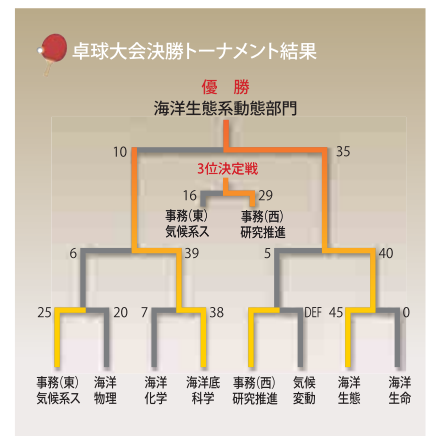
柏キャンパス一般公開 大気海洋棟1階会場

## ■ 第4回大気海洋研究所卓球大会

今年で4回目となる大気海洋研究所卓球大会が2013年12月3日から12月20日まで



卓球大会「来年は優勝！」気候系スタッフチーム



## AORI写真コンテスト2013

2013年11～12月の写真コンテストでは、新設した柏の葉部門を含む5部門で、合計37作品が賞を競いました。応募作品から身内受け狙いの迷作は消え、いずれもレベルの高い作品ばかりでした。応募者の皆様、ありがとうございました。そのために、どの部門でも得票数は僅差でした。デッドヒートを制して、資源再生分野の広瀬雅人さんが賞を総なめにされています。皆さん、打倒広瀬を合言葉に、今からシャッターチャンスを見逃さぬよう、来年に向けご準備ください。

(猿渡 敏郎)

## AORI 写真コンテスト 2013 受賞作品

賞	作品タイトル	受賞者
所長特別賞 柏の葉部門	「お昼のAORI仲間」 表紙に掲載	藤井 昌和(海洋底物理分野)
海・空部門	1 位 「コケムシ学者と海」 左頁に掲載	広瀬 雅人(生物資源再生分野)
	2 位 「気球と水たまりのある風景」	末木 健太(海洋大気力学分野)
生き物部門	1 位 「ねむたくなってきちゃった」	岩田 容子(資源生態分野)
	2 位 「海底燐花」	早川 淳(生物資源再生分野)
人物部門	1 位 「新青丸一日船長〜!!」	金 泰辰(海洋無機化学分野)
	2 位 「おじいちゃんの帽子」	広瀬 雅人(生物資源再生分野)
柏の葉部門	1 位 「台風一過」	畠 由佳(資源解析分野)
	2 位 「パールさんはいつだって笑顔」	広瀬 雅人(生物資源再生分野)
その他部門	1 位 『新「弥生」』	田辺 慎一(事務部)
	2 位 「8時だよ!全員集合」	広瀬 雅人(生物資源再生分野)

AORI  
スタッフ日記 ⑭

事務部 経理・調達チーム

大気海洋研究所には、教育研究活動を支援するさまざまな職種のスタッフが勤務しています。このコーナーでは、スタッフの仕事を通じて、研究所の活動を別の角度から紹介します。

はじめまして、経理・調達チームです。総勢8名という比較的大所帯のチームで、その仕事の範囲は旅費や謝金の申請、物品の購入手続き、それらに関する支払いや物品管理などが主な業務内容です。

例えば、出張に行くためには、旅費の申請、帰って来てからの精算、出張者への旅費振込みのための手続きが必要になります。

また、物品を買えば、当然のことながら業者への支払手続きが必要になり、規定で定められている一定額以上のものを購入する際には、見積合わせや入札などの手続きも必要になります。そして購入したあとも、消耗品の在庫管理、資産については登録をして、除却されるまでの管理をしています。

このように、大学を通して支出されるお金に関する手続きの全ては、経理・調達チームを通して行われ、1件毎にそれぞれのルールに則っているものであるかを確認しながら処理をしていきます。年

間に処理する件数は15,000件を超えます。

- 今日は、わたしたちの1日をご紹介します。
- ・9時 おはようございます、今日も1日ががんばりましょう。机の上には伝票の山です。あちらには旅費の申請書、報告書、謝金の伺い、こちらの机には請求書と契約決議書。確認をしながら財務会計システムに入力です。
  - ・10時 ドライアイスが納品されました。注文をしている研究室へ連絡です。
  - ・11時 注文してあった文房具納品のために業者さんがみえました。そろそろ業者さんや、打ち合わせのために来られる研究室の方が増えてきました。その合間をぬいながらのシステム入力処理です。
  - ・12時 待望のランチです。今日は何を食べようかな(柏キャンパス周辺はお店が少ないです)。
  - ・13時 提出されている書類について、研究室に電話やメールでご相談します。あちらの打ち合わせテーブルで

は業者さんとの打ち合わせが行われています。

- ・14時 研究室の方が自動車を借りに来ました。必要事項を確認して、貸出受付です。運転には気を付けてもらってらっしゃい。宅配便の業者さんもきました。毎日たくさんの荷物があります。
- ・15時 総合研究棟の気候システムにお部屋がある北島さんが宅野さんがキャンパスの東から伝票を持ってきます。その距離は往復1,600mになります。
- ・16時 問い合わせの電話やメールがあちこちからかかってきます。締切間際はちょっときびしい顔になっていてもご容赦を。
- ・17時 もう少して1日の仕事もおわりです。また明日も元気な経理・調達チームです。

(三浦 利恵子、是枝 龍哉、水野 裕子、依田 春子、稲葉 和美、上野 祥子、北島 靖子、宅野 恵子)



天気がいいので外に出てみました!



大気海洋研究所 事務所にて



## 海洋を社会に問う

Report ①

三股 智子



毎日新聞東京本社  
情報編成総センター校閲グループ  
海洋研究所海洋生物資源部門資源解析分野  
／農学生命科学研究科水圏生物学専攻  
修士課程 2009年3月修了

子供のころからの夢は、鯨類の研究をすること。海洋研究所（現・大気海洋研究所）で過ごした修士課程で幸運にもかなえることができました。夏にはイルカを追いかけ、研究室では統計解析に追われる充実した2年間。仲間と触れ合う中で、将来は大好きな水産や環境問題を自分の視点で社

会に聞きたいと思うようになり、新聞記者を目指しました。

私は今、毎日新聞社で記者として働いています。最初の赴任地となった青森支局では、冬の大雪ときつい方言に戸惑いながら、主に事件・事故やスポーツの取材に駆け回りました。合間には陸奥湾の生き物など興味をもったテーマを記事にしてみました。下北半島の猿害と東京・上野動物園での展示のかかわりを見つめた連載は、社内外から好評を得て印象に残った仕事となりました。

東日本大震災を経て、現在は東京本社で内勤についています。昨年は休日を利用して国立科学博物館で開催されている講座に通い、サイエンスコミュニケーターの認定を得ました。この講座は東京大学ともパートナーシップを結んでいます。大海研や東大

にも、シンポジウムなどの折に今でもお世話になっています。東北の水産業の復興や原発事故の海への影響など、取り組みたいテーマはたえません。取材の現場に戻った際には水産や科学環境の分野に取り組んでいきたいと、勉強を続けています。



下北半島の猿害と東京・上野動物園での展示のかかわりを見つめた連載

## 人事異動一覧 \*H25.11～H26.1

\*採用は新規のみ掲載。ただし、特定有期⇄短時間有期の間の異動は新規以外のものも掲載

### □ 教員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名	旧所属・職名
H26.1.1	佐藤 克文	昇任	海洋生命科学部門行動生態計測分野・教授	附属国際沿岸海洋研究センター沿岸保全分野・准教授

### □ 特定有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名	旧所属・職名
H25.11.30	山崎 友梨	退職		附属地球表層圏変動研究センター海洋生態系変動分野・特任研究員
H26.1.31	金 錫元	退職		附属地球表層圏変動研究センター生物遺伝子変動分野・特任研究員
H26.1.31	MUDHALIAR SRINIVASAN ANAND	退職		気候モデリング研究部門気候システムモデリング研究分野・特任研究員

### □ 短時間有期雇用教職員

発令日	氏名	異動内容	所属・新職名(兼務職名・所属)	旧所属・職名
H25.11.1	劉 忠方	採用	気候変動現象研究部門気候水循環研究分野・特任研究員	
H25.11.1	佐々木 由華	採用	海洋生物資源部門資源生態分野・学術支援職員	
H25.11.1	足立 洋祐	採用	気候モデリング研究部門気候システムモデリング研究分野・特任研究員	
H25.11.1	出本 紀子	採用	附属国際沿岸海洋研究センター沿岸生態分野・技術補佐員	
H25.11.1	山家 摩耶	採用	海洋生態系動態部門底生生物分野・技術補佐員	
H25.11.1	内田 由紀	採用	気候モデリング研究部門気候システムモデリング研究分野・技術補佐員	
H25.11.18	大久保 麻子	採用	海洋生態系動態部門底生生物分野・事務補佐員	
H25.12.1	Wyatt Alexander S.J.	採用	海洋化学部門生元素動態分野・特任研究員	
H25.10.31	安藤 広二郎	退職		海洋物理学部門海洋変動力学分野・特任研究員
H25.11.30	小関 玲子	退職		海洋生態系動態部門底生生物分野・事務補佐員
H25.12.31	劉 忠方	退職		気候変動現象研究部門気候水循環研究分野・特任研究員
H25.12.31	足立 洋祐	退職		気候モデリング研究部門気候システムモデリング研究分野・特任研究員

### □ 外国人客員教員等

委嘱期間	氏名	所属・職名	本務先・職名
H25.12.17～H26.3.2	LAI, Chun-Ta	気候システム研究系・招へい准教授	サンディエゴ州立大学・准教授